

アブダビとドバイの日本人学校に小石丸が届く

十月十二日、二十一時間かけて小石丸が元気にUAEへ

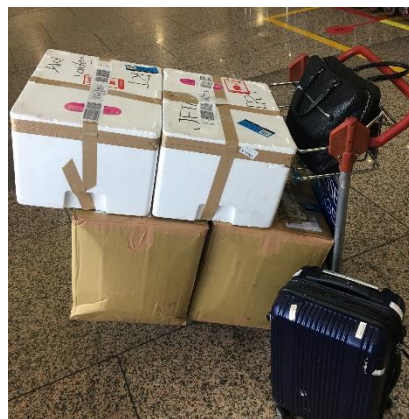


無事、梶山校長先生と久須美先生に小石丸を手渡す

本人学校に届ける一時間ほどの間に、桑の葉の温度が上昇してしまい鮮度が一気に落ちたことから、今回はドバイの日本人学校の松崎先生の協力を得て同先生が運転する車でアブダビ日本人学校にも運び込むなど万全を期しました。

東京の子供たちが育てた小石丸が十月十二日、二十一時間の長旅にもかかわらず元気にUAEドバイ国際空港に到着。アブダビとドバイ日本人学校に手渡されました。一学期は孵化した小石丸が全滅してしまつたことから、今回は「日本の子供たちが三齢まで育てたもの」、晩秋の桑の葉は固く孵化したての小石丸にやや不向きなことから「三齢まで人工飼料を使う」など細心の注意を払いました。また、前回は空港に着いてから日

また、日本と同じタイミングで孵化したUAEの小石丸は、三齢までの生存率が約五〇%ながらも、湿気対策など日本との連携が功を奏しています。特にアブダビ校の木村先生は、夏休み中に日本で参加した「シルクツアー」での経験を活かし、飼育場所候補の気温と湿度をこまめに記録。校内で最適と思われる数か所を設定し分散飼育するなど、リスクに対応した熱の入った飼育をしています。



今回、UAEに運び込んだ小石丸と桑の葉は総重量で50 kg

「小石丸が四・五齢と育つ中、飼育情報や動画の交換などを通じ、日本の子供たちにとってUAEが身近な国になっていくと思えます。そして今までは違う『生きた学習』として、蚕が国と国をつなげていく『現代版シルクロード』として育てて欲しい」と梶山校長先生は話しています。

機内女性乗務員は「シルクね」と小石丸を特別扱い

今回、日本から空輸された小石丸は、台風十九号の影響もあり海外への渡航者が木曜日から金曜日集中。そのため中国・広州経由でドバイに入るチャイナ航空便で二一時間かけて運び込みました。特に小石丸は、羽田空港、広州空港で都度状態をチェック。加湿しながら慎重に運びました。羽田空港のチェックインカウンターでは、大荷物を持つ中国人より大きな荷物に、空港係官からすぐに別カウンターに通されチェックを受けるなどんやわんや。しかしながら機内に持ち込む際、女性客室乗務員が小石丸の入ったケースを見つけすぐに、中身は何との質問。「ジャパニーズ・シルク・ワーム」との答えに「おー、シルクね」とグーサインを出して座席シート上の荷物棚ではなく、客室乗務員の制服が収められているロッカーで預かってくれるなど、シルク大国・中国のちよつとした対応に笑みが漏れました。